令和６年度
全国学力・学習状況調査結果
分析報告書

阪　南　市

◇　阪南市のホームページにも掲載します。

◇　内容等についてのお問い合わせ先

阪南市教育委員会事務局　生涯学習部　学校教育課

072-489-4541

令和６年度全国学力･学習状況調査結果分析報告書

［　目　次　］

1　全国学力･学習状況調査における阪南市の結果分析

１．　調査の概要　・・・　２

２．　学力調査結果の概要について　・・・　３

３．　児童・生徒質問紙調査結果の概要について　・・・　１５

2　資 料 編

１．　調査結果概況　・・・　２３

２．　問題別調査結果　・・・　２７

３．　児童・生徒質問紙調査の結果

小学校調査　・・・　３１

中学校調査　・・・　６８

1　全国学力･学習状況調査における阪南市の結果分析

１．　調査の概要

（1）　調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

（2）　調査の対象

市内の公立小学校第６学年児童、中学校第３学年生徒

（3）　調査事項

①　教科に関する調査（国語、算数・数学）

国語、算数・数学はそれぞれ次の２点を一体的に出題

・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能　等

・知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力　等

②　質問紙調査

学力調査を実施する学年の児童生徒を対象とする学習意欲・学習方法・学習環境・生活の諸側面等に関する調査

（4）　実施日

令和６年４月１８日（木）

２．　学力調査結果の概要について

（1）　調査結果の取扱い

① 本調査は、対象となる学年や実施教科、出題数が限られている。したがって結果はあくまでも学力の特定の一部分であり、学校教育活動の一側面を示すものであって、すべてを表すものではない。

② 本調査は、子どもたちの学力や学習状況を把握し、教科指導や学習の改善に役立てることを目的として実施したもので、競争を目的とした調査ではない。

③ 阪南市の受験者数は、小学校３６２名、中学校 400名で、この後の概要等において示されている割合(%)を人数にすると、概ね次の表のようになる。

	割合(%)	阪南市の児童・生徒数
例	1%	４名
	3%	12 名
	5%	20 名

④ 「無解答率」については、解答欄に何も書かなかった児童・生徒の割合であり、この数字が小さいほど、多くの児童・生徒が解答欄に何らかの解答を記入していることを表す。

（例）無解答率が全国平均より低い場合

→ 解答を記入した児童・生徒数が、全国平均より多かった。

無解答率が全国平均より高い場合

→ 解答を記入した児童・生徒数が、全国平均より少なかった。

（2）　調査結果の概況

問題別調査結果表の用語について

「学習指導要領の内容」は以下の通りである。
出題された問題が学習指導要領のどの領域に基づいているかを示している。

【小学校　国語】	【小学校　算数】
○知識及び技能 ・言葉の特徴や使い方に関する事項 ・情報の扱い方に関する事項 ・我が国の言語文化に関する事項 ○思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと	A 数と計算 B 図形 C 測定 C 変化と関係 D データの活用

【中学校　国語】	【中学校　数学】
○知識及び技能 ・言葉の特徴や使い方に関する事項 ・情報の扱い方に関する事項 ・我が国の言語文化に関する事項 ○思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと	A 数と式 B 図形 C 関数 D データの活用

「評価の観点」は以下の通りである。
出題された問題が教科に関する学力を評価する際、どの観点に関するものかを示している。

【小学校・中学校　国語、算数・数学】
○知識・技能 ○思考・判断・表現 ○主体的に学習に取り組む態度

「問題形式」は、解答の形式により次の３タイプに分類できる。

・選択式　　・短答式　　・記述式

（３）　調査事項別学力調査結果の概要

【小学校　国語】

分類		区分	対象問題数（問）	平均正答率(%)		
				阪南市	大阪府（公立）	全国（公立）
全体			14	63	66	67.7
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	4	56.3	63.4	64.4
		(2) 情報の扱い方に関する事項	1	85.9	85.5	86.9
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	1	71.0	72.6	74.6
	思考力、判断力、表現力等	A　話すこと・聞くこと	3	54.1	57.3	59.8
		B　書くこと	2	64.9	65.9	68.4
		C　読むこと	3	69.1	69.0	70.7
評価の観点		知識・技能	6	63.7	68.6	69.8
		思考・判断・表現	8	62.4	63.9	66.0
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	10	65.1	68.0	69.9
		短答式	2	52.5	58.7	59.7
		記述式	2	62.7	62.3	64.6

【小学校　算数】

分類	区分	対象問題数（問）	平均正答率(%)		
			阪南市	大阪府（公立）	全国（公立）
全体		16	59	63	63.4
学習指導要領の領域	A　数と計算	6	61.6	65.3	66.0
	B　図形	4	61.9	65.2	66.3
	C　測定	0			
	C　変化と関係	3	44.2	50.9	51.7
	D　データの活用	4	59.1	60.9	61.8
評価の観点	知識・技能	9	68.9	71.9	72.8
	思考・判断・表現	7	46.3	50.5	51.4
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	5	71.9	74.5	75.3
	短答式	7	55.9	61.2	62.0
	記述式	4	48.3	50.1	51.0

【中学校　国語】

分類		区分	対象問題数（問）	平均正答率(%)		
				阪南市	大阪府（公立）	全国（公立）
全体			15	55	57	58.1
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	3	57.4	59.1	59.2
		(2) 情報の扱い方に関する事項	2	56.5	59.4	59.6
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	1	75.0	75.8	75.6
	思考力、判断力、表現力等	A　話すこと・聞くこと	3	54.2	56.4	58.8
		B　書くこと	2	60.1	63.3	65.3
		C　読むこと	4	45.1	47.2	47.9
評価の観点		知識・技能	6	60.0	62.0	62.0
		思考・判断・表現	9	51.5	53.8	55.4
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	9	59.0	60.4	61.0
		短答式	3	60.5	62.0	61.8
		記述式	3	36.9	42.2	45.5

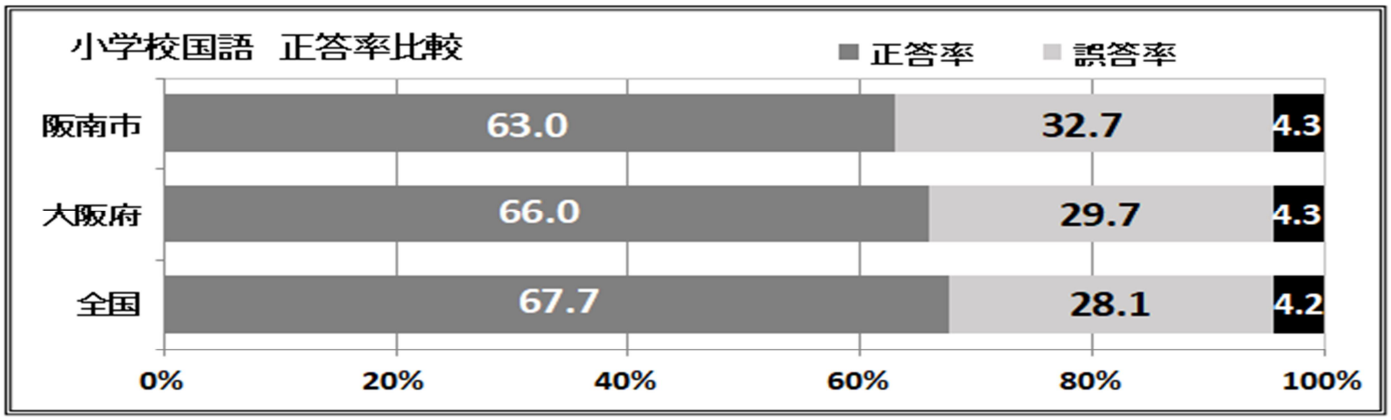
【中学校　数学】

分類	区分	対象問題数（問）	平均正答率(%)		
			阪南市	大阪府（公立）	全国（公立）
全体		16	49	51	52.5
学習指導要領の領域	A　数と式	5	47.6	50.4	51.1
	B　図形	3	37.5	40.5	40.3
	C　関数	4	58.7	58.9	60.7
	D　データの活用	4	50.5	53.3	55.5
評価の観点	知識・技能	11	59.8	61.9	63.1
	思考・判断・表現	5	25.9	28.2	29.3
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	5	56.3	56.9	58.5
	短答式	6	62.7	66.1	67.0
	記述式	5	25.9	28.2	29.3

小学校国語 問題

阪南市の平均正答率は 63％、大阪府の平均正答率は 66％、全国の平均正答率は 67.7％であった。物語文における記述問題で一定の成果が出ている。しかし、図表やグラフなどを用いて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる問題については引き続き課題がある。大事なところを明確にして読むことや文章を読む際に必要な基本的なことばの力を今後も伸ばしていく必要がある。

正答率



◇阪南市の平均正答率を大阪府の平均正答率と比べると-3.0 ポイント、全国の平均正答率と比べると-4.7 ポイントであった。

成果や課題の見られた主な問題

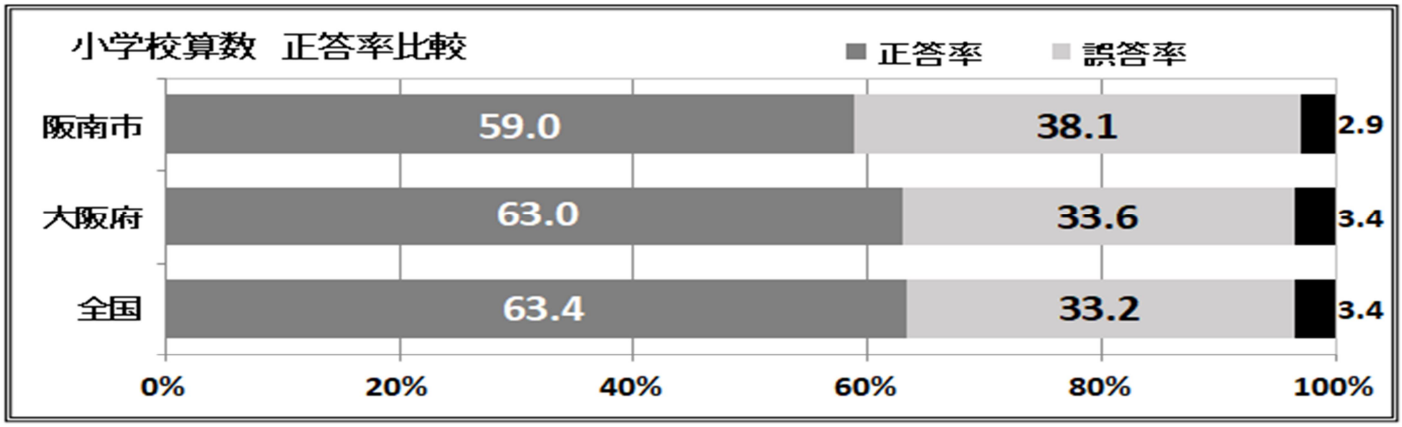
△3設問三は、「思考・判断力・表現力等」「C 読むこと」の内容からの出題で、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかをみる記述式の問題である。「C 読むこと」の問題は、昨年度課題が見られた問題であったが、今年度の正答率は、府と同等またはやや上回っており、成果が見られた。

▼2設問二は、「思考・判断・表現」「B 書くこと」の内容からの出題で、目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるようにするための書き表し方を工夫することができるかどうかを見る記述式の問題である。無解答率も高く、正答率は国や府より低かった。記述式の問題として、上記の人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることの成果は出ているが、目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くことなど、自分の考えが伝わるように書き表すことに課題がある。誤答の類型をみると、示された複数の条件のうち一部の条件は満たしているものの、すべてを満たせていない誤答が多かった。

小学校算数 問題

阪南市の平均正答率は 59％、大阪府の平均正答率は 63％、全国の平均正答率は 63.4％であった。知識・技能を問う問題において比較的正答率が高く、成果が出ている。また、課題であった記述式問題においても、国、府よりも無解答率が低いものがほとんどであった。一方、場面や目的に応じて数量や関係に着目し、数学的に思考・判断・表現する問題においては課題が見られる。

正答率



◇阪南市の平均正答率を大阪府の平均正答率と比べると 4.0 ポイント、全国の平均正答率と比べると 4.4 ポイント低かった。

成果や課題の見られた主な問題

△3(2)の円柱の展開図に関する問題や、5(1)の円グラフから割合を読み取る問題など、「知識・技能」をみる選択・短答式の問題で、国、府を上回る正答率となっており、基礎的・基本的な知識に関しては、成果が見られた。さらなる定着に向け、学習の基盤となる基礎的・基本的な知識・理解を深める学習を引き続きすべての教科等で取り組んでいく。

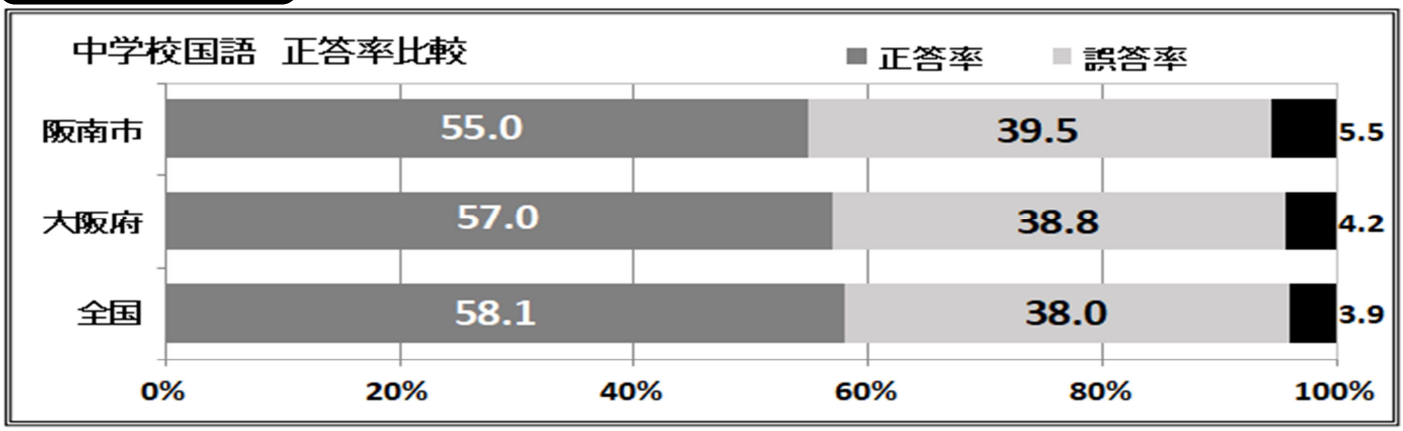
△多くの問題において、無解答率が低かった。最も無解答率が高い問題は5(3)の折れ線グラフから数値を読み取り、条件に当てはまることを言葉と数を用いて書く記述式問題であったが、国・府どちらも無解答率が 12.6％であるのに対し、阪南市は 9.9％と低かった。令和4年度まで記述式問題では無解答率が高い傾向であったが、昨年度に引き続き、解答への意欲が感じられ、成果が見られた。

▼3(3)は、「B 図形」領域、「思考・判断・表現」の観点の問題で、正答率が 24.6％であり、国の正答率より 11.9 ポイント、府の正答率より 9.9 ポイント低かった。球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができるかどうかをみる短答式問題である。解答の傾向から提示された図形の体積を求めるために必要な図形を構成する要素を見いだすことに課題が見られる。図形の体積や面積を求める際、必要となる情報を自ら選び出すためには、図形の意味や性質の理解を深め、図形を構成する要素を見いだし、活用できる力を育成していくことが必要である。

中学校国語 問題

阪南市の平均正答率は 55%、大阪府の平均正答率は 57%、全国の平均正答率は 58.1%であった。「思考・判断・表現」をみる問題で、府の正答率とほぼ同等の問題が多く、「知識・技能」を見る問題では、国、府をやや下回る結果であった。ただ、「思考・判断・表現」の記述式問題では、国、府の正答率と開きがあり、無解答率が高い傾向が見られたのが課題である。普段の学習において話し合いでの発言や文章から目的に応じて必要な情報を取り出したり、文章を工夫して書いたりすることができるようにすることが大切である。

正答率



◇阪南市の平均正答率を大阪府の平均正答率と比べると-2.0 ポイント、全国の平均正答率と比べると-3.1 ポイントであった。

成果や課題の見られた主な問題

△3設問一は、「書くこと」からの出題であり、物語を書くために集めた材料を取捨選択した意図を説明したものとして適切なものを選択する問題である。阪南市の正答率は 81.0%と高く、目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることがおおむねできていると考えられる。

△4設問三は、「我が国の言語文化に関する事項」からの出題であり、行書の特徴を踏まえた書き方について説明したものとして適切なものを選択する問題である。阪南市の正答率は 75.0%で、国、府と大きな差はなかった。本市の課題の一つである「我が国の言語文化に関する事項」において比較的正答率が高かった。

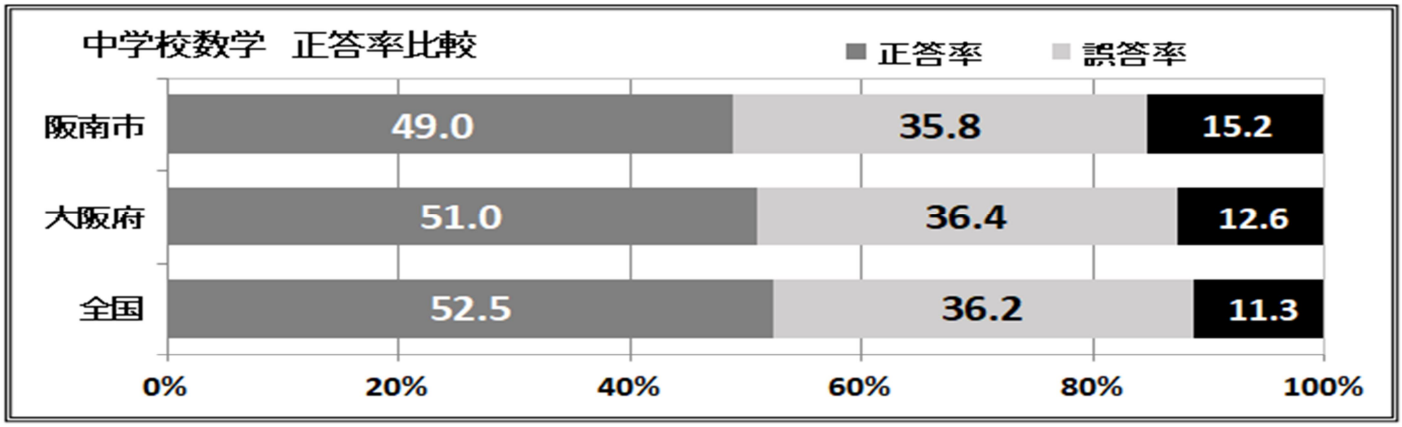
▼2設問一は、「読むこと」からの出題で、文章と図とを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈することができるかどうかをみる問題である。阪南市の正答率は全国より 5.5 ポイント、府より 5.2 ポイント低かった。図表や写真などを含む説明的な文章を読む際には、示されている図表などが、文章のどの部分と関連しているのかを確認するなどして、書き手の伝えたい内容をより正確に読み取ることが重要である。

▼2設問四は、「読むこと」をみる記述式問題であり、目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる問題であった。阪南市の正答率は全国より 7.3 ポイント、府より 5 ポイント低かった。要約する際には、目的を明確にしたうえで、必要な情報を十分に取り上げているか、自分がまとめた内容と元の文章の内容とに隔たりがないかなどを確認しながら、適切さや正確さを意識して要約することができるような指導が有効である。

中学校数学 問題

阪南市の平均正答率は 49%、大阪府の平均正答率は 51%、全国の平均正答率は 52.5%であった。「知識・技能」をみる問題については、国、府の正答率とほぼ差がなく成果が見られた。「図形」や「関数」の領域に関する問題でのグラフにおける「知識・技能」をみる問題では7割を超える高い正答率であるが、「思考・判断・表現」をみる記述式問題では、正答率が低く、無解答率も高い状況である。表、式、グラフなどを用いて問題解決する場面を設定し、それらをどう用いたかについて数学的に説明できることが大切である。

正答率



◇阪南市の平均正答率を大阪府の平均正答率と比べると、-2.0 ポイント、全国の平均正答率と比べると-3.5 ポイントであった。

成果や課題の見られた主な問題

△8(1)の二つのグラフにおけるy軸との交点について、事象に即して解釈することができるかどうかをみる問題では、国、府の正答率よりも高かった。(3)のグラフの傾きの意味を事象に即して解釈する問題でも正答率は7割を超えていた。一次関数については、基礎的・基本的な知識・技能は身に付いていると考えられる。

▼7(2)の「データの活用」領域の記述式問題は、箱ひげ図の問題であった。複数の箱ひげ図を比較して、データの分布の状況について判断した理由を説明することが求められたが、正答率は 20.1%にとどまっている。箱ひげ図の問題は令和5年度調査においても出題されており、課題が継続していると考えられる。今後も普段の授業において、日常生活や社会の事象を題材とした問題などを取りあげ、データを活用しながら問題解決することができる力を身につけることが大切である。

▼8(2)の「関数」の領域の記述式問題は、一次関数を用いて、事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する問題であるが、正答率が 14.5%と低かった。一次関数について、思考の過程を的確に表現したり、考えたことを数学的な表現を用いて説明したりすることに課題があると考えられる。授業の中で、判断の根拠を明らかにして説明し合う活動を取り入れ、思考の過程や根拠などを数学的に表現し合ったり、表現されたものを解釈し合ったりすることが大切である。

（４）学力状況調査の結果から

今回の調査結果を見ると、国語においては、①自分の考えを伝えるために書き表し方を工夫すること、②必要な情報を取り出すことや表現の効果を考えることに課題が見られた。また、算数・数学においては、①図形や単位量当たりの大きさ（速さなど）について、深い理解を伴う知識の習得やその活用、②複数の集団のデータの分析の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに課題が見られた。

さらに、記述式の問題については依然として課題が見られる。無解答率については改善されてきていることが成果ではあるが、選択式、短答式の問題と比べると、無解答率が高く、正答率が低い傾向にある。誤答及び無解答の児童生徒については、それぞれ個別の原因があることが想定されるため、個々の分析を行うことが必要である。

（５）今後の課題の解決に向けて

【語彙の習得に向けて】

語彙の習得に関しては、文章等の理解のベースとなるため、引き続き、取り組む必要がある。言語活動の機会を設ける際にも、新しく学習した言葉を使うことを意識させ、定着を図ることが必要である。また、言葉を意味通りに活用できているのかを確認していくことが重要である。

【物事を関連付けて考える力の習得に向けて】

今回調査があった国語や算数・数学に限らず、物事を個別に捉えるのではなく、関係性を踏まえながら考える練習を繰り返すことが必要である。

様々な学習において、日常生活を絡めながら、活用できる知識・技能を習得させることが重要であり、既に学習していることがら（既習事項）と常に関連付けて考えさせる習慣づけを行うことや、多くの資料から、必要な資料を選択する活動を調べ学習などで取り入れることも、物事を関連付けて考える力の育成につながる。

【記述式問題の正答率の向上に向けて】

記述式問題の誤答や無解答に関しては、前述のとおり様々な要因が考えられ、児童生徒一人ひとりがどこでつまずいているのかを把握する必要がある。

つまずきが考えられるポイントを以下の４点に整理した。

①提示された文章やグラフ等の資料の読み取りができているか

②問題の意図や答え方が理解できているか

③自分の考えを持つことに課題があるのか
④記述することに困難さがあるのか
以上の４点が考えられる。

①提示された文章やグラフ等の読み取り、②問題の意図や答え方の理解に関しては、「読み取る力」が課題と考えられる。

まず、読書活動により文章に多く触れることが重要であると考えられる。ただ文章に触れるだけではなく、物語などを読んだ際には、読んだ後に内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動を取り入れる。また、社会科や理科などの学習において、グラフ等の記録などを読み取り、そこからわかることをもとに話し合ったり、説明したりする活動を取り入れることが読み取る力の向上につながると考えられる。さらに、国語の学習で、文の基本構造の理解などのいわゆる「文法」を理解することも重要である。

次に、③自分の考えを持つこと、つまり「考える力」の育成については、普段の授業で考える機会を多く持つことが必要であるが、そのためには児童生徒自身が「考えよう」「考えたい」と思う課題設定が重要となる。小学校低学年から、「なぜだろう」「どうしてだろう」と興味を持つことで、事象であれば自ら調べたり、考えたりし、話し合う活動であれば、目的意識をもって相手にたずねる学習につながっていく。また、目的意識を持たせることで考える必要が生まれる学習活動例として、本市で取り組んでいる海洋教育やSDGｓにつながる学習活動が挙げられる。自分の生活や未来に関わる課題に直面したときに、「自分には何ができるか」を考える必要が生じる。学習を深める過程において、隣の児童生徒に説明する、他学年や他校に発表する、地域に発信するなどの目的設定を行うことで、より「考える力」を育成することにつながると考えられる。

しかし、考える場面が設定されたとしても、どう考えればいいのかがわからない場合は、どのように考えるのかを具体的に指導・支援することが大切である。児童生徒が「考えるための技法」を身につけるために、「比較する」「分類する」などの考える際のポイントを視覚的に整理することができるシンキングツールの活用が考えられる。

最後に、④記述すること、に課題がある場合は、表現する力の育成が重要となる。

ここでも、読書は有効と考えられる。様々な文章に出会うことで、多様な表現方法に触れることができる。音読することは、文章を読むことと自身の耳で聞くことの両方ができ、優れた表現の深い理解につながると考えられる。ただ、機械的に繰り返し音読するのではなく、新しい言葉に出会い、使い方を知ることや、登場人物の心情や情景を表現しながら朗読するといった目的を持たせて行うことが大切である。

なお、書く場面に関しては、一人一台端末（タブレット）の導入により、より意図的に設定する必要があるため、委員会活動なども含め、自分自身の考えを文章や図、表などを用いて表現する機会を多く持つことが大切である。

【市として重点的に指導していくこと】

阪南市教育委員会事務局では、毎年子どもたちの学校及び学習環境における方針（『阪南市学校園教育基本方針』）を立てており、学力については、以下の通り示している。

重点１．未来に向かって「確かな学力」と「生きる力」を育成する

「確かな学力」と「生きる力」の育成とは、

①生きて働く「知識・技能」の習得

②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成

③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養　のこと

【取組の重点】

＊ＳＤＧｓに関する学習や活動を通じ、新しい時代を切り開き、持続可能な社会の創り手となるために必要な資質・能力を育成すること

＊幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領の趣旨の実現に向けた授業改善を推進すること

＊自ら身近な課題の解決に取り組む、海洋教育を通した海洋リテラシーの育成をはじめとする環境教育を推進すること

【取組項目】

○「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざし、学習の基盤となる基礎的・基本的な知識・理解を深めるとともに、文章や表、グラフ等を読み取り、論理的に自分の考えを導くなどの言語活動の充実を図る。

○学習意欲の向上を図るとともに、生きて働く知識・技能を習得させ、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力を育成する。

○海洋教育などの体験活動を通して「課題解決学習」や「探求型協働学習」を進める中、主体的に課題を発見し解決しようとする態度を身に付け、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」を涵養する。

○教科横断的な視点で教育課程を編成するにあたり、小学校においては、海洋教育を意識したカリキュラムマネジメントを行う。

○地域や関係団体と連携を図り、「海洋教育副読本」などを活用した環境教育に取り組むことで、自分たちが暮らす社会と地域に興味を持ち、豊かな自然環境を進んで保全しようとする態度を育成する。

○すべての教科等で、学習の基盤となる基礎的・基本的な知識・理解を深めるとともに、文章や表、グラフ等を読み取り、論理的に自分の考えを導くなどの言語活動を充実させ、言語能力の育成を図る。
○子どもたちの学力向上、教員の教科指導力向上のため、研究授業を実施し、授業改善に努める。
○児童・生徒にどのような力が身についたかを的確にとらえるとともに、指導の改善につなげるため、指導と評価の一体化を充実させる。
○家庭における学習習慣の定着を図り、自ら進んで学ぶ態度を育成する。
○学校図書館を有効活用するとともに、市立図書館と連携して、読書活動・学習活動の充実を図る。
○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に留意し、学びの連続性を踏まえた教育課程を編成する。

【令和６年度　阪南市学校園教育基本方針より抜粋】

３．　児童・生徒質問紙調査結果の概要について

全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙調査より、「生活の様子」「自分について」「家庭での学習」「地域や社会との関わり」の４つの観点について、１０項目の調査結果概要を取りあげる。

・「生活の様子」に関する質問項目

１．朝食を毎日食べていますか

２．毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか

３．毎日、同じくらいの時刻に起きていますか

・「自分について」に関する質問項目

４．自分には、よいところがあると思いますか

５．将来の夢や目標を持っていますか

６．人の役に立つ人間になりたいと思いますか

・「家庭での学習」に関する質問項目

７．学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）

８．土曜日や日曜日など学校が休みの日に、１日当たりどれくらいの時間勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）

・「地域や社会との関わり」に関する質問項目

９．新聞を読んでいますか

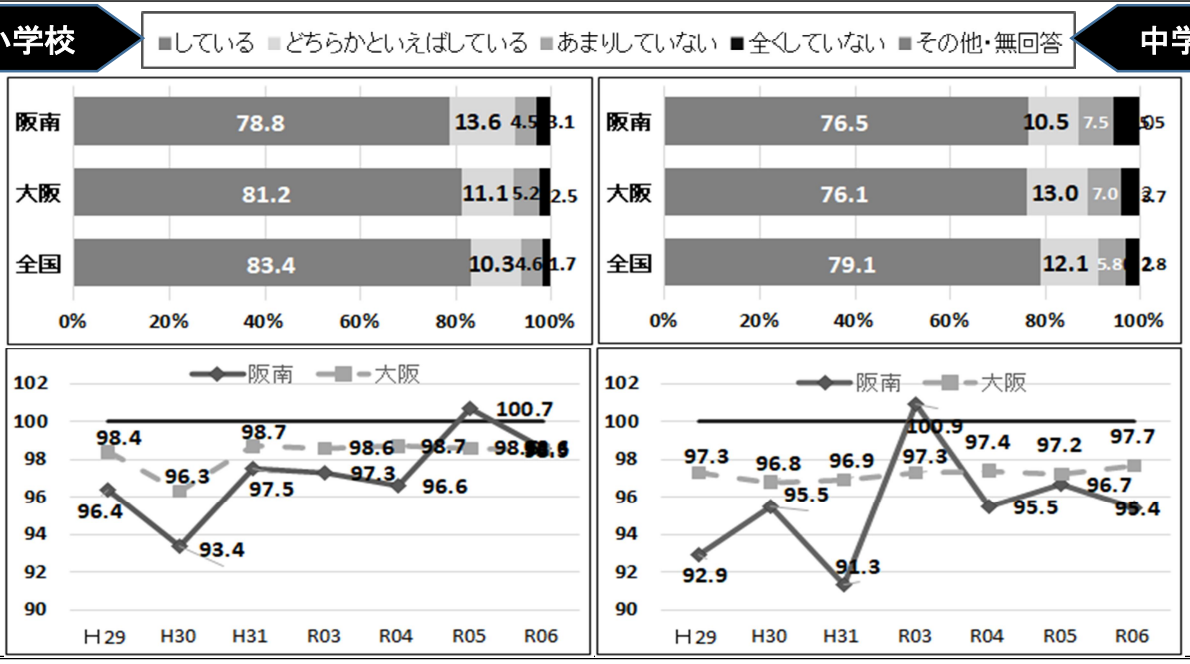
１０．地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか

令和6年度全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙結果より

1 朝ごはん

Q：朝食を毎日食べていますか

小学校



中学校

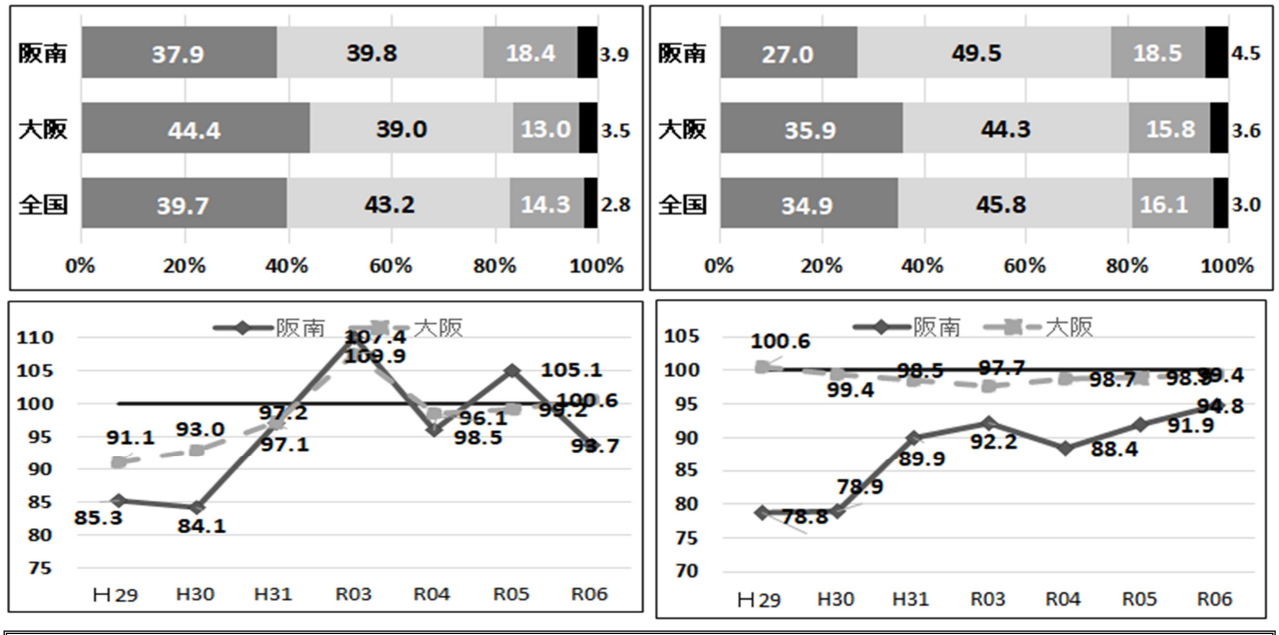
「している＋どちらかといえばしている」の回答率について、全国を 100％とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

「朝食を毎日食べていますか」の質問に対して肯定的な回答をした児童・生徒の割合は、小・中学校ともに令和5年度を下回ったが、小学校は府を上回っている。

2 寝る時刻

Q：毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか

小学校



中学校

「している＋どちらかといえばしている」の回答率について、全国を 100％とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

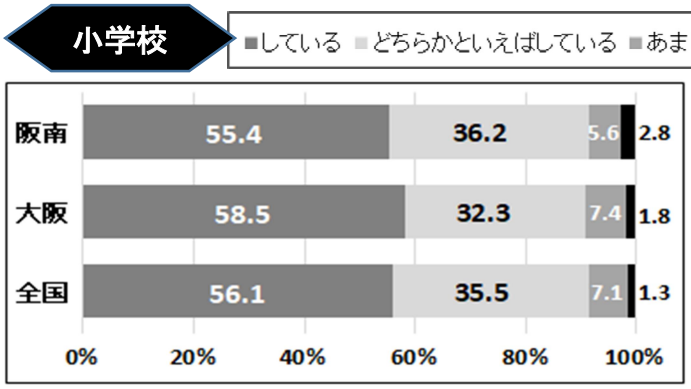
「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」の質問に対して肯定的な回答をした児童・生徒の割合は、小学校は令和5年度を下回ったが、中学校は3年連続で増加している。

令和6年度全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙結果より

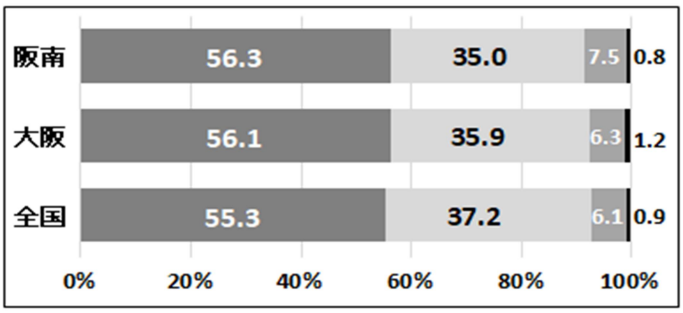
3 起きる時刻

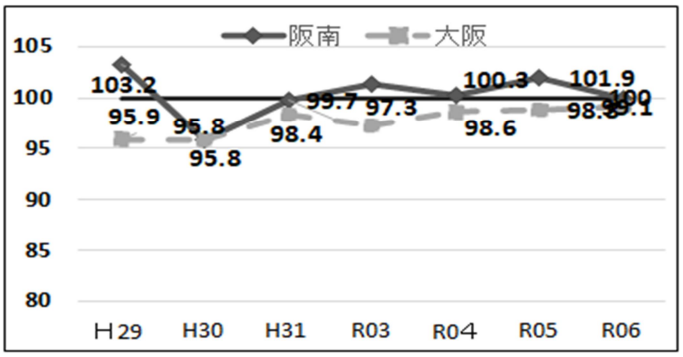
Q：毎日、同じくらいの時刻に起きていますか

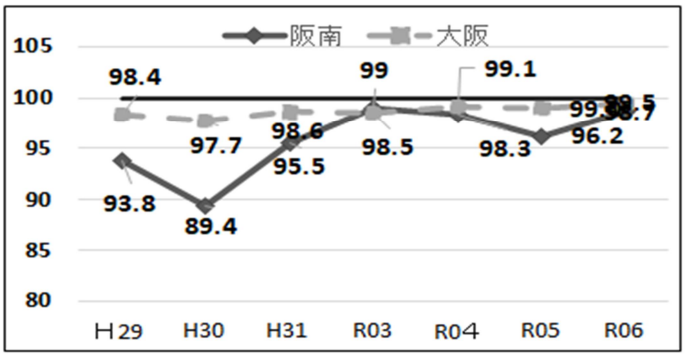
小学校



中学校







「している＋どちらかといえばしている」の回答率について、全国を 100%とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

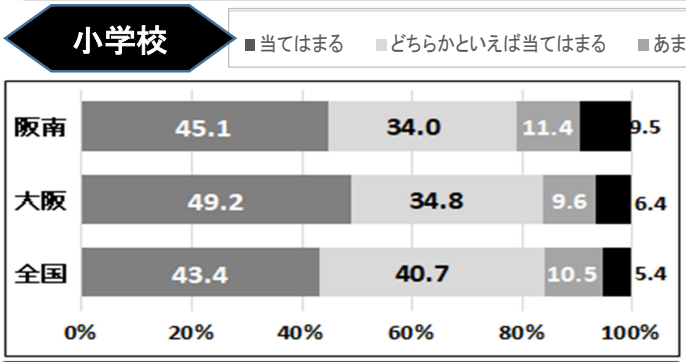
「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」の質問に対して肯定的な回答をした児童・生徒の割合は、小学校は令和5年度を下回ったが全国と同程度であった。中学校は令和5年度を上回っている。

令和6年度全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙結果より

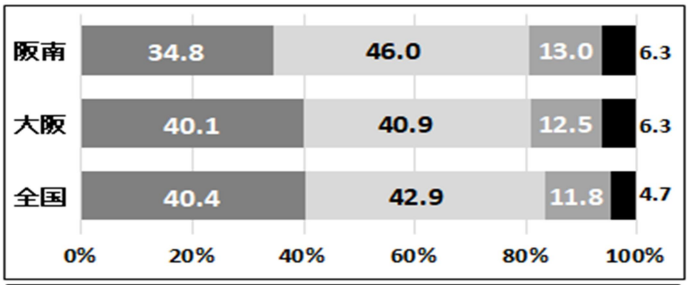
4 自分にはよいところがある

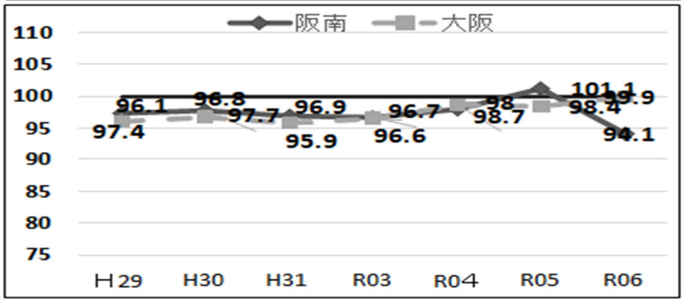
Q：自分には、よいところがあると思いますか

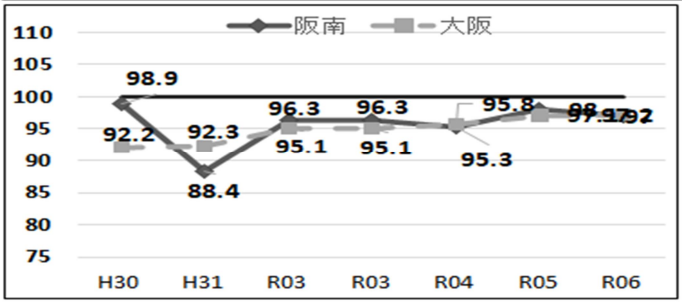
小学校



中学校







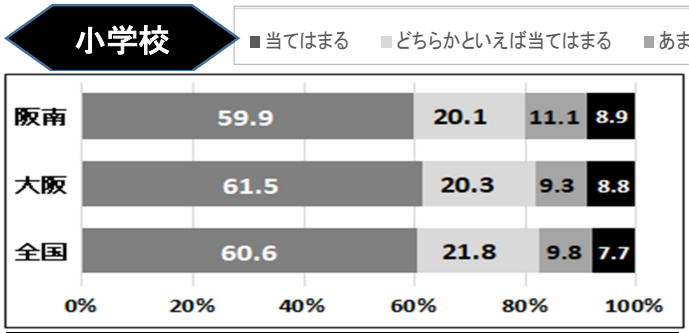
「当てはまる＋どちらかといえば当てはまる」の回答率について、全国を 100%とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

「自分には、よいところがあると思いますか」の質問に対して肯定的な回答をした児童・生徒の割合は、小・中学校ともに令和5年度を下回った。

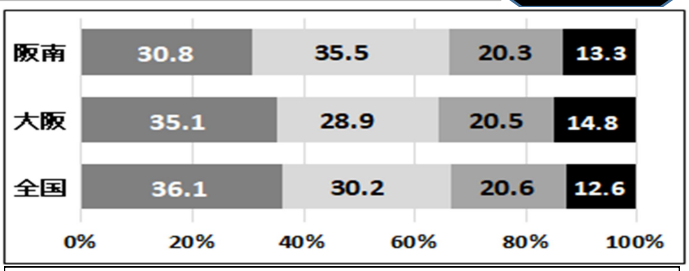
5 将来の夢や目標

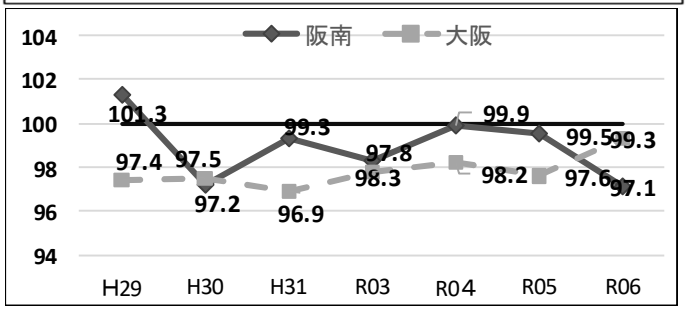
Q：将来の夢や目標を持っていますか

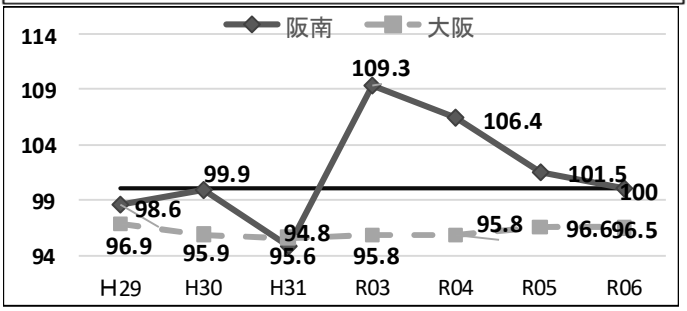
小学校



中学校







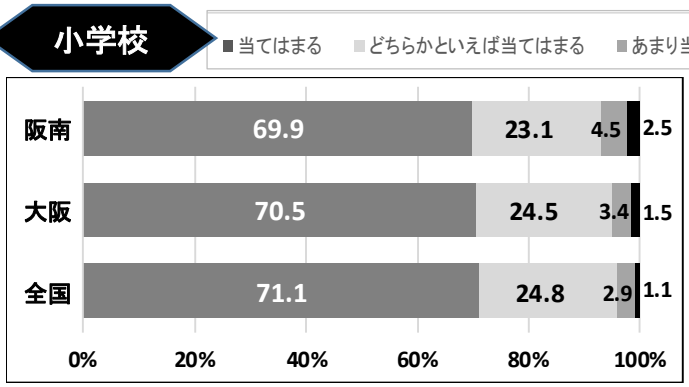
「当てはまる＋どちらかといえば当てはまる」の回答率について、全国を 100%とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

「将来の夢や目標を持っていますか」の質問に対して肯定的な回答をした児童・生徒の割合は、小・中学校ともに令和5年度を下回ったが、中学校は全国と同等であった。

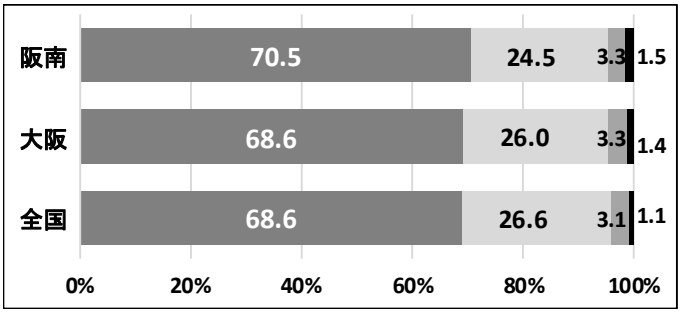
6 人の役に立つ

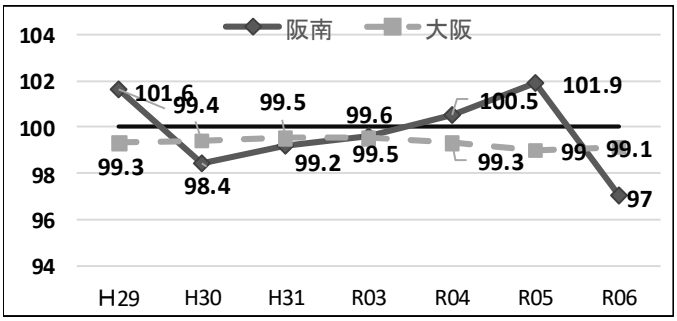
Q：人の役に立つ人間になりたいと思いますか

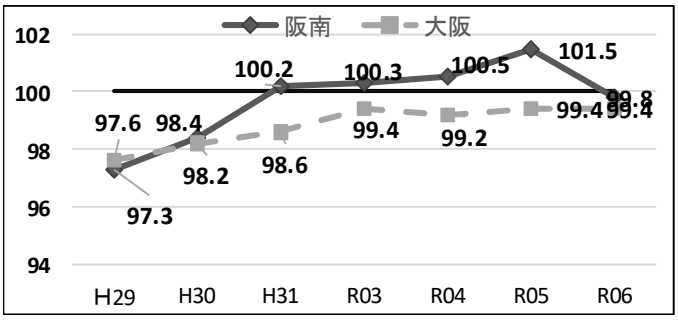
小学校



中学校







「当てはまる＋どちらかといえば当てはまる」の回答率について、全国を 100％とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

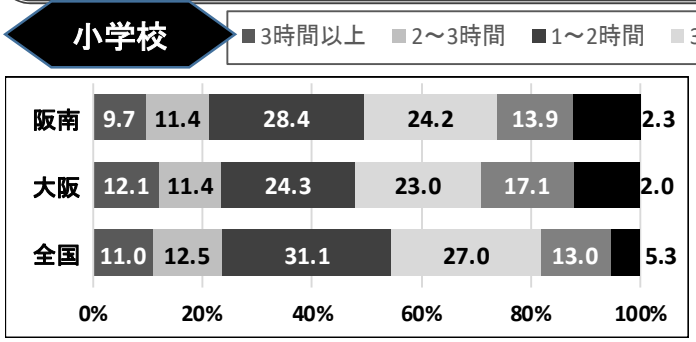
「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の質問に対して肯定的な回答をした児童・生徒の割合は、小・中学校ともに令和5年度を下回ったが、中学校は府を上回っている。

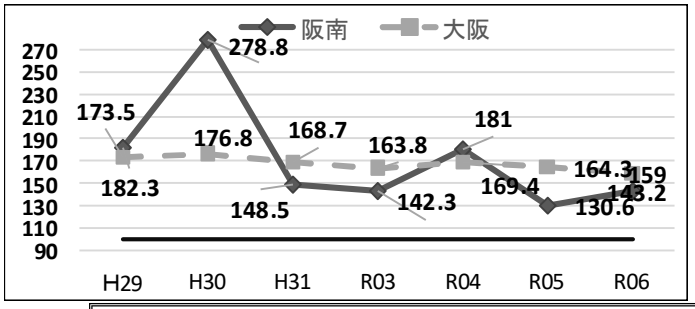
令和6年度全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙結果より

7 学校以外の勉強時間

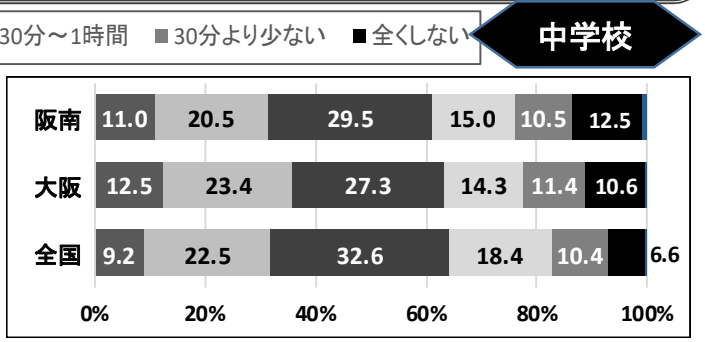
Q：学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）

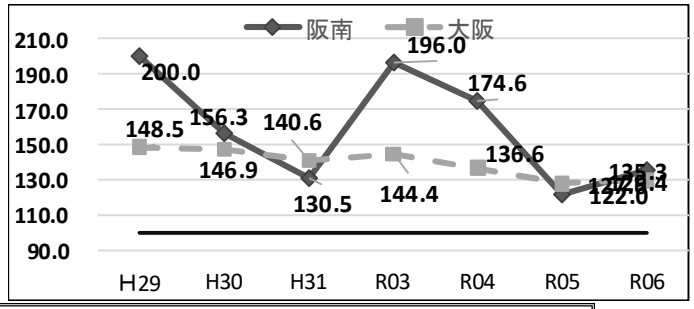
小学校





中学校





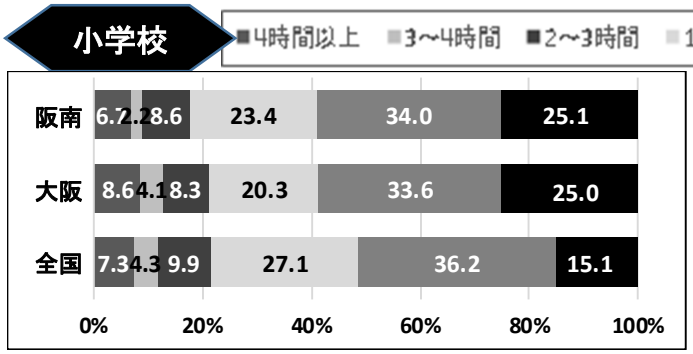
「30 分より少ない＋全くしない」の回答率について、全国を 100%とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

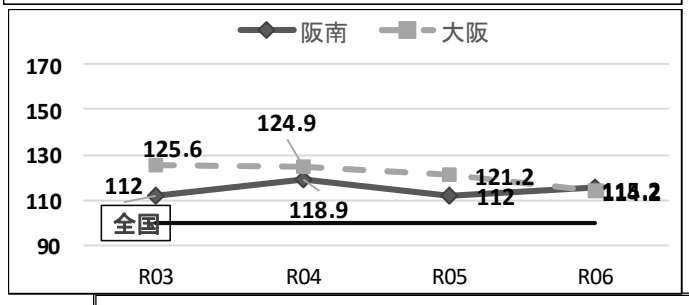
「学校の授業時間以外に、普段、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」の質問に対して、「30分より少ない＋全くしない」と回答をした児童・生徒の割合は、小・中学校ともに令和5年度と比べると増加した。

8 土曜・日曜の勉強時間

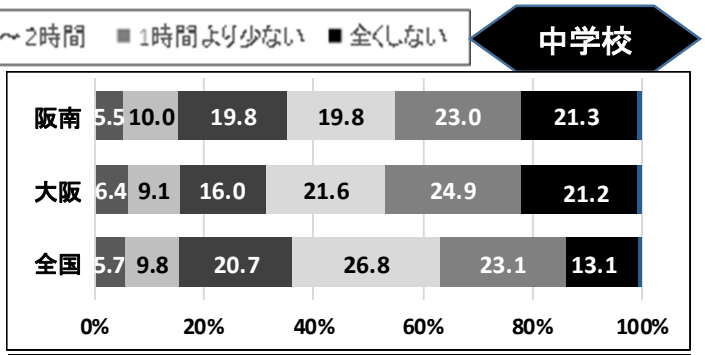
Q：土曜日や日曜日など学校が休みの日に、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）

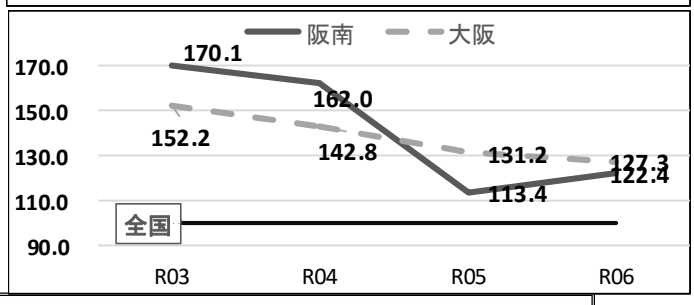
小学校





中学校





「1時間より少ない＋全くしない」の回答率について、全国を 100%とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

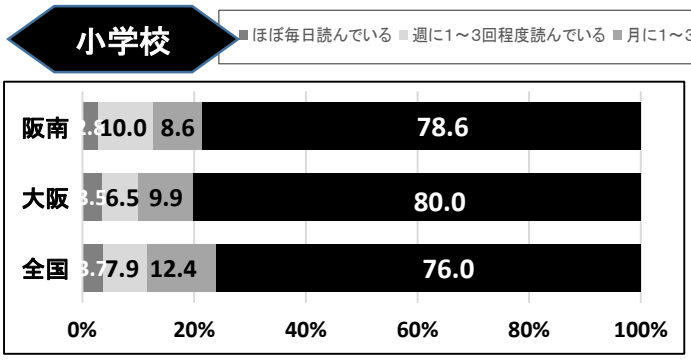
「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」の質問に対して、「1時間より少ない＋全くしない」と回答をした児童・生徒の割合は、小・中学校ともに令和5年度と比べると、増加した。

令和6年度全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙結果より

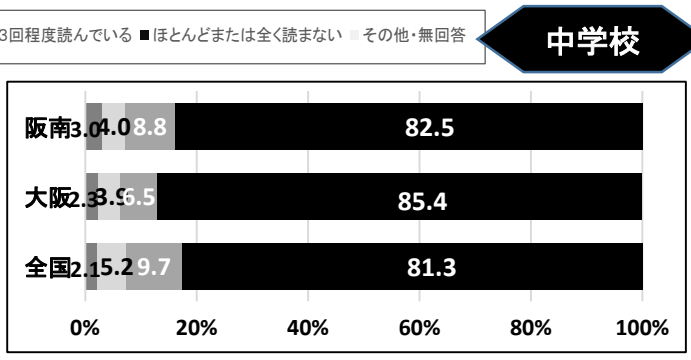
9 新聞

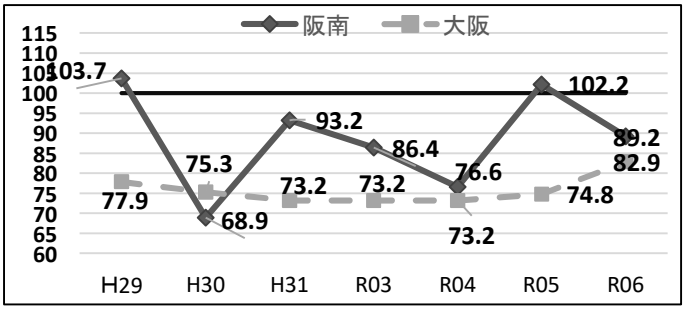
Q：新聞を読んでいますか

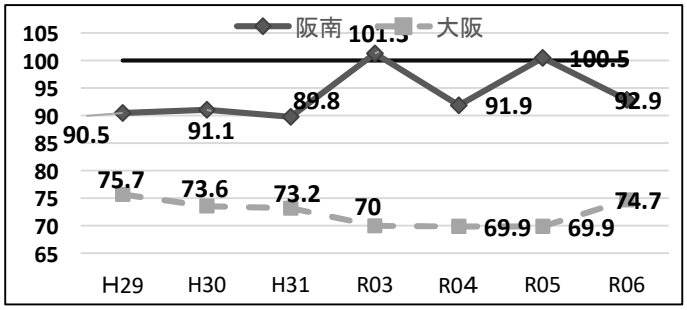
小学校



中学校







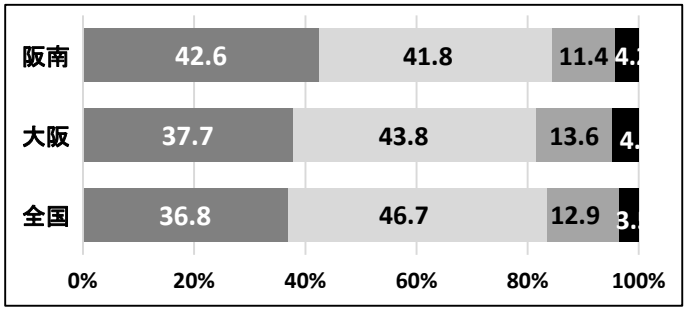
「ほぼ毎日＋週に1～3回＋月に1～3回、新聞を読んでいる」の回答率について、全国を 100%とした時の大阪府及び阪南市の経年比較

「新聞を読んでいますか」の質問に対して、「ほぼ毎日＋週に1～3回＋月に1～3回、新聞を読んでいる」と回答した児童・生徒の割合は、小・中学校ともに令和5年度を下回っているが、府を上回っている。

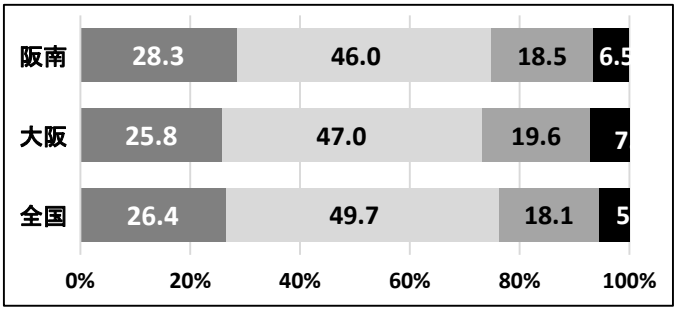
10 地域への貢献

Q：地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか

小学校



中学校



本質問は、今年度より、市の分析として取り上げたため、経年比較は記載せず

「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」の質問に対して肯定的な回答をした児童・生徒の割合は、小・中学校ともに、府を上回っており、小学校は全国においても上回っている。

児童・生徒質問紙調査結果の分析について

児童・生徒質問紙調査結果について、過年度分析してきた項目の「肯定的な回答」について取りあげる。

【２　寝る時刻】について

P.１８の「２　寝る時刻」については、小学校は令和５年度を下回ったが、中学校では３年連続で増加している。

また、「３　起きる時刻」は、小学校で全国と同程度、中学校でも昨年度を上回っており、基本的な生活習慣である起床・就寝時刻について改善傾向が見て取れる。

【７　学校以外の勉強時間】について

P.２２の「７　学校以外の勉強時間」「９　土曜・日曜の勉強時間」について、「１時間以上学習している」と回答した児童生徒は府と同程度であるが、「３０分より少ない」、「全くしない」と回答した児童生徒は、令和５年度に比べると増加している。引き続き、家庭学習について定着を図る必要がある。

【９　新聞】について

今年度は、読書についての質問項目が設定されていなかったため、読書量についての分析はできなかった。

P.２４の「９　新聞」については、令和５年度を下回っているが、府を上回る結果となっている。自分の興味がある情報だけでなく、様々な情報が提供される媒体である新聞に触れる機会をもつことは、情報活用能力の育成にもつながるため、新聞を活用した活動を取り入れるなど、新聞に触れる機会を増やしていくことが大切である。

【１０　地域への貢献】について

P.２４の「１０　地域への貢献」については、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対して、肯定的な回答をした子どもの割合は、小学校では国・府を上回った。中学校においても府より高い割合を示している。地域の方々と関わることを通して、社会の一員としての自覚や責任を感じることにつながると想定され、自己肯定感や自己有用感の涵養につながるものと考えられる。

以上、４項目の質問について見てきたが、生活の様子をみる３つの全ての質問では、「寝る時刻」について中学校では上昇傾向にあるものの、まだ、国、府より低い項目もあり、さらなる改善が必要であると考えられる。家庭と協力して、子どもたちの生活改善に向けた取組をさらに進める。